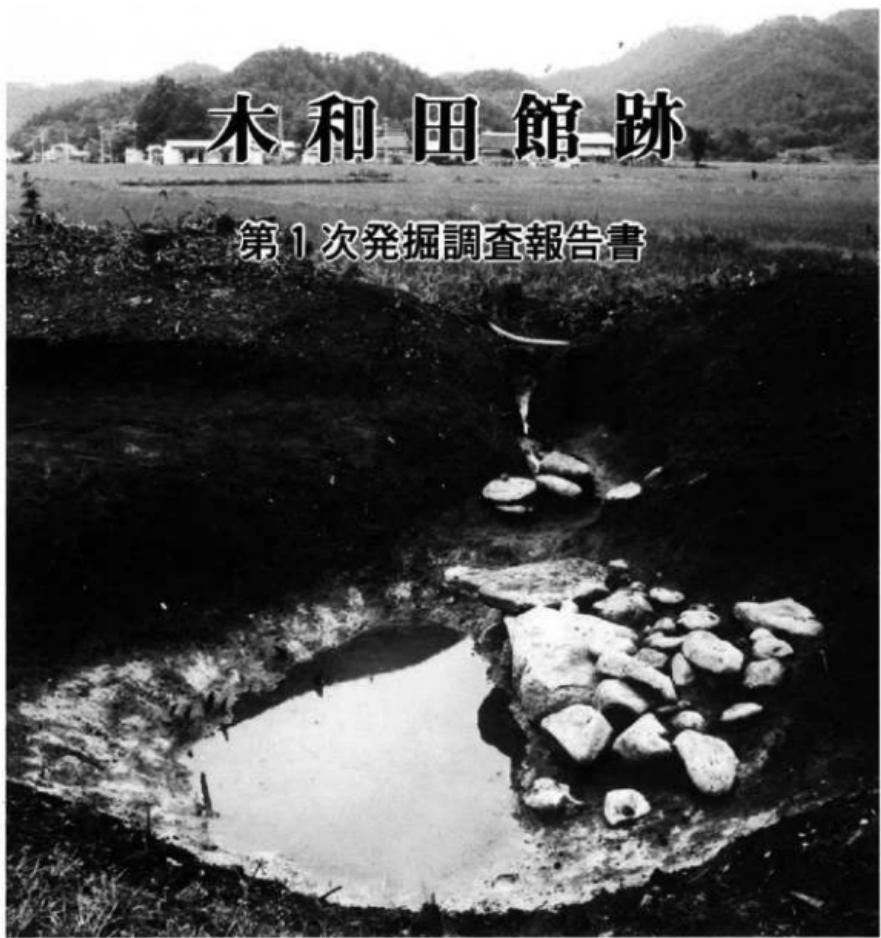


K-517

米沢市埋蔵文化財調査報告書 第20集

木和田館跡

第1次発掘調査報告書



1987

米沢市史編さん委員会
米沢市教育委員会

序 文

本報告書は、本市中世史の資料とするために本市市史編纂室の依頼による学術調査の成果をまとめたものであります。

昭和60年までに確認された本市の遺跡383ヶ所のうち城館跡は27ヶ所あり、米沢市の中心地区にある米沢城跡をはじめ、周辺平地から山間部に散在しています。特に今回調査した木和田館跡は、低い山裾の比較的平地に土壘を台形に巡らした館跡で土壘の形が残っているものです。

本市館跡調査は今回が初めてであり、12世紀前後の古文書の皆無な時期の地方豪族関係の様子の一部が明らかになるものと思われます。

本市教育委員会では、これらの貴重な資料を整理しながら、中世の歴史と文化を探究し、豊かな住みよい郷土を築くため、埋蔵文化財の保護保存にいっそう努力する所存です。

本調査にあたり格別のご指導ご協力を賜わりました山形県教育庁文化課、特別調査員川崎利夫氏、地権者の佐藤慶三郎氏、佐藤忠次氏、地元の皆様、さらに本市市史編纂室に対し、心から感謝申しあげます。

昭和62年2月

米沢市教育委員会

教育長 北川 二郎

例　　言

I 本報告書は米沢市史編さん事業に基く、米沢市地区における中世史の究明および城館跡の形態把握の一環として調査を実施した木和田館跡学術調査報告書第1集である。

II 発掘調査は米沢市史編さん室の要請を受けて米沢市教育委員会が主体となり、昭和61年6月23日～同年7月12日までに実施したものである。

III 調査体制は下記の通りである。

調査総括 安部敏夫

調査担当 手塚 孝

調査主任 菊地政信

調査員 原 三郎, 蔵田清二, 佐藤峯雄, 我妻重義, 山田 隆, 青木昭博

調査協力 里 宗男, 佐藤忠次, 佐藤慶三郎, 地元木和田地区, 米沢市史編纂室

調査指導 川崎利夫, 橋爪 健, 佐藤正四郎, 奥野中彦

事務局 平間重光, 梅津幸保, 金子正廣

IV 本報告書の作成は手塚 孝が中心となって、橋爪 健・梅津幸保が補佐した。VIの全体的なまとめについては川崎利夫氏の玉稿を賜わった。図面関係は手塚が行い、測量図のトレースは梓事務所の協力を得た。編集は手塚・金子正廣が担当した。

本　文　目　次

序 文	
例　　言	
I 遺跡の概要	1
II 調査に至る経過	3
III 測量調査	4
(1)木和田館跡の現状	4

(2)測量	4
(3)測量調査の結果	4
A. 漆跡	5
B. 土壘	6
C. 外部施設	6
IV 発掘調査	6
(1)方形溝状遺構	6
(2)土壘の構造	10
V 検出された遺物	11
VI 城館跡からみた木和田館の位置	14

挿図目次

第1図 木和田館跡付近の地形図	2
第2図 木和田館跡計測基点概念図	5
第3図 木和田館跡調査区平面図	7・8
第4図 木和田館跡北側土壘セクション図	9
第5図 木和田館跡基本柱状図	11
第6図 木和田館跡出土遺物(1)	12
第7図 木和田館跡出土遺物(2)	13
付図 木和田館跡測量図	

図版目次

第1図版 木和田館跡の発掘(1) (木和田館跡から北を望む、南西コーナー部の土壘)	
第2図版 木和田館跡の発掘(2) (北西コーナー部の土壘及び漆跡、北東コーナー部の土壘及び漆跡)	
第3図版 木和田館跡の発掘(3) (北側部の土壘版築状況、発掘調査区全景)	
第4図版 木和田館跡の発掘(4) (水場近景西より、水場近景南より)	
第5図版 木和田館跡出土の遺物(1)	
第6図版 木和田館跡出土の遺物(2)	

I 遺跡の概要

本遺跡は米沢市大字木和田字中曾根40, 41番地に所在する。米沢市内から直線距離で東に約4kmに位置する木和田地区は梓川（天王川）を境にして、西に上竹井地区、尾根を挟んで北に古郷部、長手地区、同じく東は海上地区、そして南側は広大な八幡原工業団地が隣接している。背後、両側に連なる舌状の丘陵は、万世地区の刈安、梓山、笊籠を中心として、上郷地区の一念峰一帯から高畠町の文珠山にかけて細長く分布する新第三紀中新世の笊籠層（Zaru formation）が主体をなし、火山性の軽石凝灰岩（Pumice tuff）に分類される。笊籠層基盤をなす米沢東部の山麓一帯は軟弱で風化しやすい岩盤ゆえに不規則な舌状丘陵が著しく発達し、河川や沢等の侵食作用によって扇状地や入江状の低地を形成している。

ことに梓川扇状地は米沢市内を流下する河川の中では最も古く、且つ明瞭に発達した大地であり、肥沃で安定した地形内には八幡原遺跡群、戸塚山古墳群等を含む156箇所の遺跡が存在する。勿論、この遺跡数は米沢市内の扇状地に分布する遺跡群では最大なものであり、今現在米沢市内に確認された遺跡の約半数を占めるものである。年代も縄文草創期、早期といった縄文時代最古に属するグループを筆頭に縄文の各時期、弥生、古墳、奈良、平安、中世～現代と途切れることなく継続し、東北でも類を見ない多様さである。縄文草創期、早期から開始された歴史の足跡を鑑みても梓川扇状地が驚異的な速さで形成され、定着していった事を物語っているものといえよう。

さて、木和田地区も広義の梓川扇状地内にある。東西に延びる二つの丘陵が入江状に発達して西端ですばり丁度、小規模な盆地状を有している。三方の自然を背景に水田地帯に点在する集落構成はまさに中世集落の絵巻物を実見している様である。この様に恵まれた環境ゆえに、古くから先人の生活痕跡も数多く残っている。第一図に示した遺跡分布図を基に紹介すると、北側丘陵の南山麓には八世紀前半の木和田古墳No124、同じく東に隣接してNo215の木和田窓跡、同じく東丘陵にかけては縄文前期の集落跡No217の木和田遺跡、南から西丘陵にかけてはNo262の木和田塚a、No264の木和田塚d、そして木和田館跡No263がある。先の木和田塚aは一辺12m位の方形状塚であり、中世（12～14世紀）頃の密教に係わる修法壇と考えられ、次の木和田塚bは尾根を利用して構築した三基の塚群であり、全てが方形プランを示し、大きさも12～5mと小規模なことから中世墳墓の可能性が濃厚である。最後の木和田館跡は木和田地区の南丘陵となる横山の北斜面から山麓にかけての緩斜面を整地して土壘を方形に巡らしている。この中で木和田古墳と木和田窓跡の両者は既に発掘調査を実施している。前者の木和田古墳は昭和26年に柏倉亮吉氏が主体部の発掘を実施し、横穴式古墳であることが分かった。後者の木和田窓跡は昭和47年に置賜考古学会の手によって調査が行なわれ、八世紀前半の無段地下式登窓と判明、須恵器の窓跡としては県内最古のものとなった。



第1図 木和田館跡付近の地形図

II 調査に至る経過

米沢市を中心とする置賜地方には現在約150基の城館跡が存在すると言われている。特に伊達四八館、米沢城跡、川西町原田城跡等は周知の通りである。ところが、これだけの豊富な城館跡が存在するにも係わらず、正式な調査を実施した例は一度もない。ここ十数年来、市町村史の編纂事業が急速に進められているが、文献資料の乏しい中世史に関しては割愛せざるを得ない現状にある。その点、米沢市においても例外ではない。しかし、米沢市史編纂室では空白の中世史を埋めるために、米沢市教育委員会と独自に古代～中世遺構の研究を行なっている地元の考古学研究グループ「まんぎり会」とで協議を重ね、次の調査計画を実施する方向で一致した。

- a. 米沢市に存在する城館跡の分布調査及び分布図作成。
- b. 城館跡の規模・形態を把握するための測量調査及び略図作成。
- c. 城館跡の時期・年代・建物跡の配置及び城館跡の性格を把握するための発掘調査。
- d. 城館跡に係わりを有する遺構（墳墓・塚・土壇・寺院）の分布調査及び中世信仰に関する遺構（経塚・修法壇・道業・業場）の分布調査。

市史編纂室では昭和60年度からの調査実施を前提に関係機関との協議を行い、予算や調査期間等を吟味した上で、小規模で保存状態の明瞭な城館跡を幾つか選出し、検討した結果、木和田館跡が最も良好であるとの判断を下し、第一次の城館跡学術調査を実行することになった。

調査は市史編纂室の要請を受けた米沢市教育委員会が主体となって、縮尺百分の一の測量図作成と年代を把握するための発掘調査と区分し、昭和61年6月中旬頃から約20日間の予定で実施することにした。地主の佐藤忠次・佐藤慶三郎両氏の快諾とともに、地元上郷史跡保存会（会長・星 宗男氏）、同木和田地区の絶大なご協力を賜わって調査を開始したのは6月23日からである。

尚、調査日程及び作業内容は下記の通りである。

測 量	立木代採	6月23日～6月24日
	トラバース設定	6月24日～6月25日
	測量	6月26日～7月1日
発 掘	表土剥離	6月30日～7月2日
	面整理・精査	7月3日～7月7日
	遺構掘下げ	7月8日～7月9日
	図面作成	7月10日～7月11日
	現地説明会	7月12日(土) AM10:00

III 測量調査

(1) 木和田館跡の現状

木和田館跡の位置する地形は標高270～290mの横山から盛興院の裏山にかけて「コ」の字状にのびる丘陵の接点に当り、横山山頂から北方向に突出した尾根と尾根の谷間（山並間）を利用して構築している。付近一帯はナラ・クリ等の雜木に覆われているが、平坦な館跡内だけは杉が移植され、神秘的なおもむきを呈している。主軸長をほぼ南北方向に置く館は、土壘と濠跡からなるもので、東側土壘の一端にブリッヂを有する他は土壘、濠跡とも全周し、所謂「単郭」式の形態をなす。現地形をそのまま利用している関係上、西に面した土壘は尾根に沿って斜位に進行することで、平面の形状は台形プランを示している。館跡の保存状況は良好であり、北に面した土壘の一部が最近の杉伐採・運搬の際に削平した以外は明瞭に残っている。

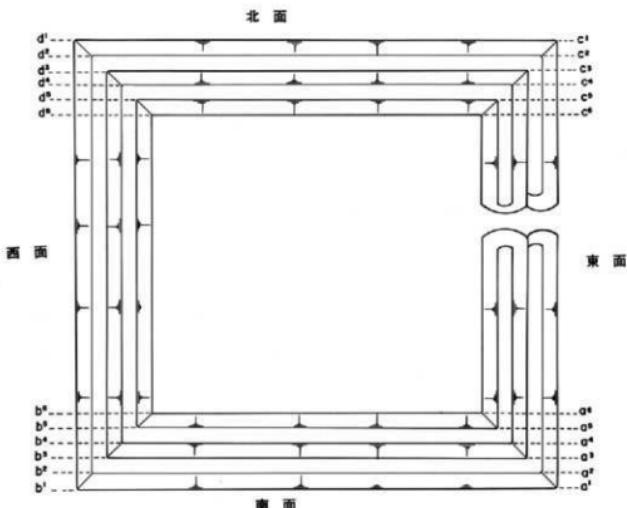
(2) 測量

木和田館跡の南北長を基準線として、十字トラバースを採用した。後述する池状の水場付近に基点T1を設け、南方向にT5・T16・T6・T18・T19の6基点を基本中軸線として、さらに東西線をT1から西側土壘上部にT2、東にT4、中にT3、T5から西へT15、東にT7を置き、立木の関係から南方向にT8～T11の5基点を補助中軸線として、東側の土壘上にT8からT14・T10からT13、そして、西側にもT16からT17と計19基点を設定した。測量は基点を中心に平板・レバールを併用しながら土壘・濠跡はもとより、現状で確認可能な落ち込み等も把握する様に努め、最終的な選点数は1967点となる。なお、基本中軸線の方位はN-33°-Eで、整図による等高線は25cmを用いた。

(3) 測量調査の結果

測量調査で判明した結果を数値を用いて述べてみよう。計測する際の基本的な方法として、次の用語を便宜的に使用する。館を形成する濠跡、土壘の各コーナー部分に計測基点を設け、北西部をa¹～a⁶、北東部をb¹～b⁶、南西部をc¹～c⁶、南東部をd¹～d⁶とし、基点の名称をa¹が濠上部（以下b¹・c¹・d¹）・a²を濠下部（以下b²・c²・d²）、a³を土壘外下部（以下b³・c³・d³）、a⁴を土壘上部（以下b⁴・c⁴・d⁴）、a⁵を土壘上内部（以下b⁵・c⁵・d⁵）、a⁶を土壘内下部（以下b⁶・c⁶・d⁶）と仮称することにした。さらにa¹とb¹間を北面濠上部径、c²とd²間を南面濠下部径、a³とc³間を西面土壘外下部径、b⁴とd⁴間を東西土壘上外部径、a⁵とb⁵間を北面土壘上内部径、c⁶とd⁶間を南面土壘内下部径（以下同じ）としておく。

これによると北面の濠上部径（a¹+b¹）が62.2m、南面の径（c¹+d¹）が49.2m、西面の径（a¹+c¹）が53.2m、東面の径（b¹+d¹）が40.5m、同様に北面の濠下部径（a²+b²）が59.5m、南面径（c²+d²）が47.2m、西面の径（a²+c²）が50.1m、東面の径（b²+d²）が39.1m、北面の土壘外部径（a³+b³）が57.8m、南面の径（c³+d³）が46.8m、西面の径（a³+c³）が48.4



第2図 木和田館跡計測基点概念図

m、東面の径 (b^3+d^3) が 38.4m 、北面の土壘上外部径 (a^4+b^4) が 54.2m 、南面の径 (c^4+d^4) が 43.7m 、西面の径 (a^4+c^4) が 44.2m 、東面の (b^4+d^4) が 36.4m 、北面の土壘上内部径 (a^5+b^5) が 51.5m 、南面の径 (c^5+d^5) が 40.8m 、西面の径 (a^5+c^5) が 41.0m 、東面の径 (b^5+d^5) が 34.0m 、最後の北面の土壘内下部径 (a^6+b^6) が 47.5m 、南面の径 (c^6+d^6) が 36.2m 西面の径 (a^6+c^6) が 36.3m 、東面の径 (b^6+d^6) が 30.5m となる。従って濠を含めた木和田館跡の総面積は $2,676\text{m}^2$ 、土壘内部の面積が $1,337\text{m}^2$ と算定できよう。次に濠・土壘、内部施設・外部施設について触れてみよう。

A 濠 跡

土壘の外部に付随してめぐる。西面と東面の濠は丘陵山麓に沿って掘り込まれていることもあるって底面が狭い「V」字状を有する。南面及び北面の濠は底面が広く、ことに南面に関しては一部を深く掘り下げた小規模な池状を呈するところもある。館全体が南から北、西から東に傾斜しているものもある、濠の深さは濠上部 (a^1) から濠下部 (a^2) までと仮にすれば、北面は 22cm ~ 51cm 、南面が 21cm ~ 110cm 、西面が 110cm ~ 125cm 、東面が 43cm ~ 95cm となる。濠幅も同様に濠上部から土壘上外部 (a^4) とすれば、北面が 3.1m ~ 4.2m 、南面が 4.1m ~ 5.5m 、西面が 2.9m ~ 6.9m 、東面が 2.5m ~ 3.5m となり、深さ、濠幅とも西面と南面が明確である。

B 土 壁

北面土壁の北西寄りと東面土壁の北寄りの一端がブリッヂ状に切れている他は、ほぼ一定の幅をもって配されている。先の北面ブリッヂは、後述する内部施設の項で述べることにして、後の東面の空間は濠との関連も含め門跡と考えられる。土壁の幅は土壁外下部 (a° ~ d°) と土壁内下部 (a° ~ d°) 間とで求めると、西面に関しては、5.2m~7.5mと最も広く、次いで南面の5.2m~6.9m、北面が3.9m~5.2m、東面が3.8m~5.8m、高さも土壁内下部から土壁頂点まで西面で93cm~221cm、南面で61cm~121cm、東面で95cm~147cmとなる。

C 外部施設

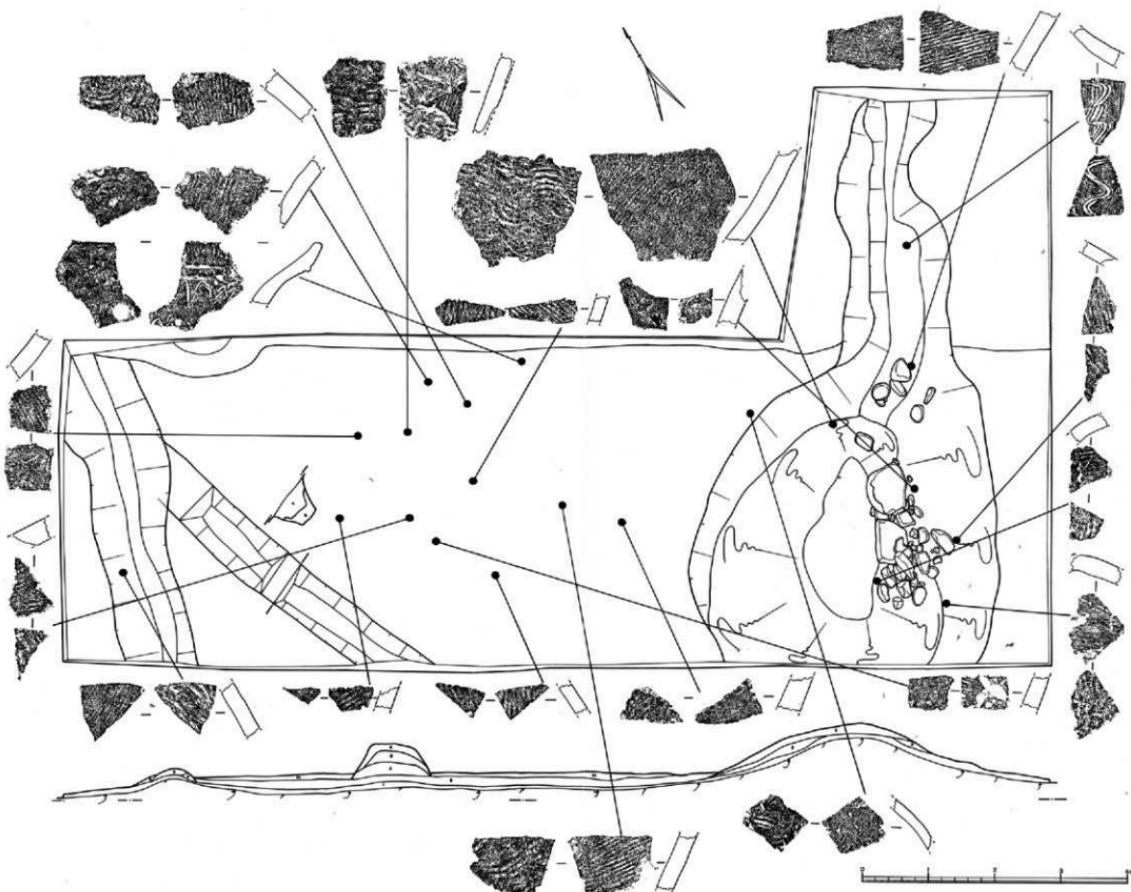
館に付随するものと少し離れて存在する二者に分れる。前者は西面濠に沿って作られた1.5m~2m位の道路跡と南側の山腹を「Y」字状に掘り込んだ溝状造構があり、それは南面の濠内に接続し、さらに土壁を切断している。後者は東面の濠に直行し、東側に曲する幾つかの溝状造構や小規模な高まりを示す土壁状の造構である。今回の調査範囲を館跡に限定していることもあって明確にできないが、ある程度の建物跡を含む外部施設が存在することは明らかである。また「Y」状の溝跡は戸塚山中世造構群にみられる溝跡と同様でもあり、沢水を濠内に引水として利用したものであろう。そして一部は館内の用水として使用していたとも考えられる。内部施設については次の発掘調査の中で触れることにしたい。

IV 発掘調査

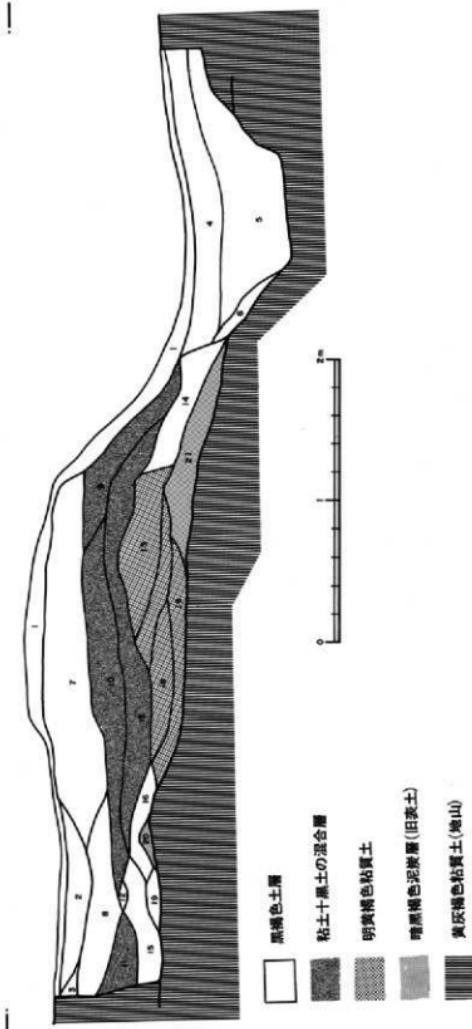
北西端に背袋状の落ち込みと溝跡が方形状に配される箇所と北面の削平された土壁の二箇所をトレント法用いて調査を行なった。先の溝状は池状を中心に15.5m×5mと土壁に接続する部分に4m×4mの計93.5m²を精査範囲とし、後の土壁は1.5m×7mを基本としたが、濠内の涌水もあり濠に関しては1mの幅で掘り下げた。

(1) 方形溝状造構（第3図）

西面の土壁から7m離れ、南方向に12m、東に曲して12.5m、さらに北に90°曲し、土壁を切断して濠内に合流する。西側も土壁に沿ってからすぐに北に曲して、土壁を切って濠内に向っている。従って北面は北面土壁によって区画されており、平面形は方形に近いし、レベル的な差から推測すれば、西側の濠から水を取り入れ、溝を回して、東面の北端に排水する機能であったものとみられる。不整規円形状を有する落ち込みは調査した結果長径630cm、短径460cmで深さ140cmをなし、東壁面から底面にかけて凝灰岩の切り石と河原石とで配列した洗い場跡であることが判明した。洗い場は円礫を土台にして、その上部に切り石を二個両列させ、さらに周辺に礫を組み合せた簡単なものである。切り石面を洗い場面とすれば、底面からの高さ45.2cm、長径65cm、短径48cm、礫を加えた範囲を加えると長径120cmとなる。ここで機能的なことも含せ、洗い場と仮称する。第7図の砥石1点と須恵器系陶器7点が検出したのみであった。



第3図 木和田館跡調査区平面図



第4図 木和田駅跡北側土壤セクション図

洗い場を除く溝跡は調査区（西面溝）の状況も参考に推測すれば、ほぼ一定しており幅70cm～98cm、深さ40cm位とみられる。次に溝内部について述べることにする。

当初、溝で区画された内部に建物が存在するものと考えていたが、遺構確認面には何の痕跡も認められなかった。念のため下方に10cm程下げてみると調査区の西寄りにK Y 2を検出した。主軸方向がN-10°-Wを有し、平均溝幅が75cm、深さ48cmをなし、埋土は第10層の地山層と第11層の混合層が2枚となっており、埋土2層下面から植物性の有機物がわずかながら認められた。埋土となるNo1、No2層は両者とも人工的堆積を示しており、有機物の混入状況等の吟味からK Y 2は館内に埋設された暗渠と考えられる。また暗渠が掘り込まれた第11層上部の第10層は整地層と推測する。整地層に関しては次の土壌断面の中で詳しく触れることにする。ちなみに方形溝状遺構の性格であるが、洗い場は本遺構の東面に付隨する施設であり、内部の空間との係わりは直接的には意味を呈さないであろう。従って、広儀の広場的な存在として考えると、一種の儀式や祭祀に関連する施設であろう。

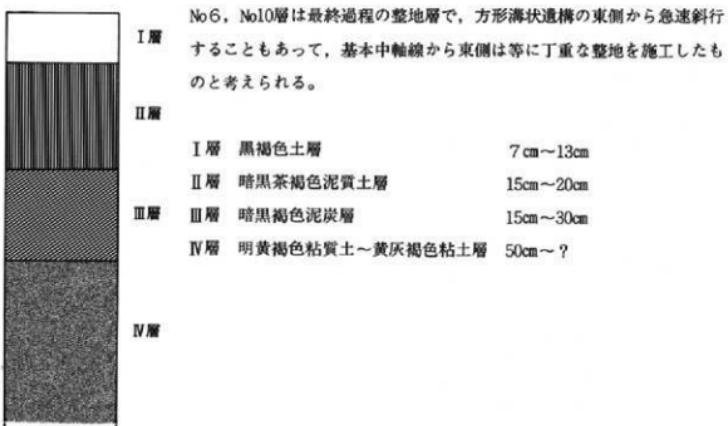
(2) 土壌の構造

土壌の高さや幅は東西、南北によって異なることをすでに指摘した通りである。今回は測量調査に重点を置いたこともあって、土壌の版築状況を確認したのは北面土壌のみである。従って、木和田館跡の土壌がすべて同様な版築を示すとは言えない。

北面の土壌の断面を観察すると版築に利用した埋め土は基本的に三つのグループに大別される。第1のグループとしては、土壌の基盤版築に用いたもので、黄灰褐色粘土層（地土）を主体にするもの。（層No15・17～19）

第2のグループは第1のグループの地山層に暗黒褐色土層を加えた混合層を主体とするものであり、中間的な版築として用いられている。（層No9～11・13）

第3のグループは黒土層を中心としたものであり、最終的な版築として用いられている（層No7・8・12・14～16・19）。このことから北面の土壌に関しては第1の土層→第2の土層→第3の土層の順で盛土したものと言えよう。そして、No1は土壌構築後に堆積した表土、No2・No3は土壌内側の堆積層、No4～No5は北面濠内の堆積層となり、No20・21の暗黒褐色泥炭層は旧表土と判った。ここで注目されるのがNo20・21の存在である。理解しやすい様に木和田館付近の基本的層序を示したのが第4図である。これによると土壌の断面のNo20・21層はⅢ層、第1のグループとした粘土層はⅣ層、第2のグループとした混合層はⅢ層とⅣ層、第3のグループはⅡ層に比例する。つまり、北面土壌の一部を含む一帯はⅡ層～Ⅳ層を削平した後に整地を実施しながら土壌を構築したものと推測する。整地は丁度館跡の中央部（測量調査の南北中軸線）から東側にかけた一帯が沢になっており、泥質層が厚く堆積していることもある、湿地帯の土砂を取り除き、上記の工法で整地を行い、排水を考慮した暗渠を埋設したものと考えられる。先の方形溝状内の



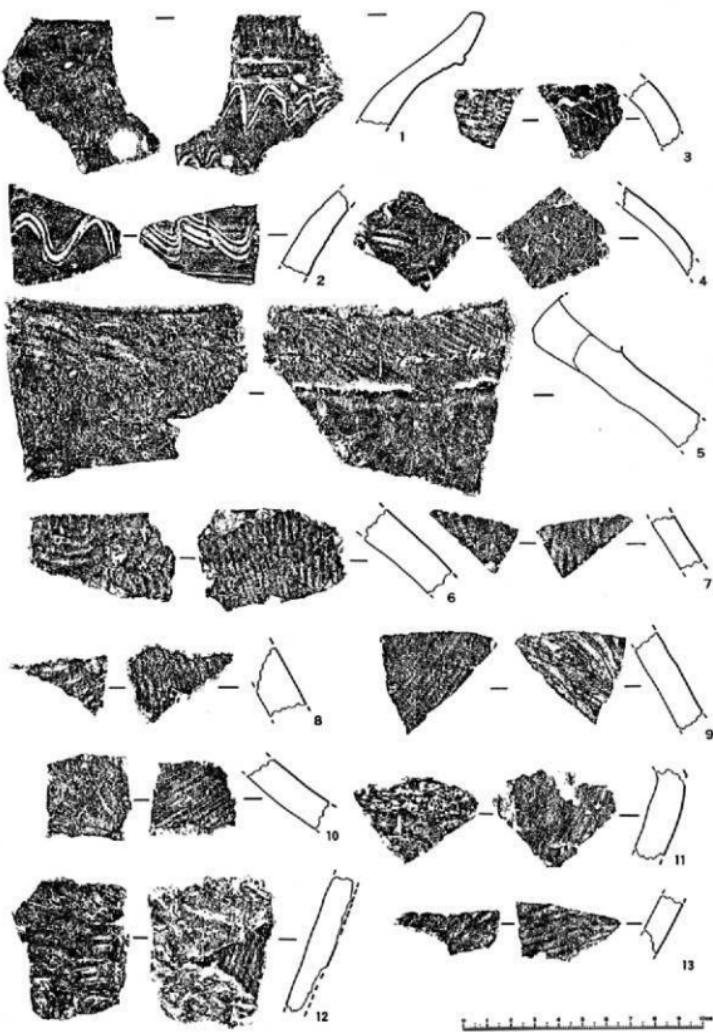
第4図木和田館跡基本柱状図

V 検出された遺物〔第6図・第7図〕

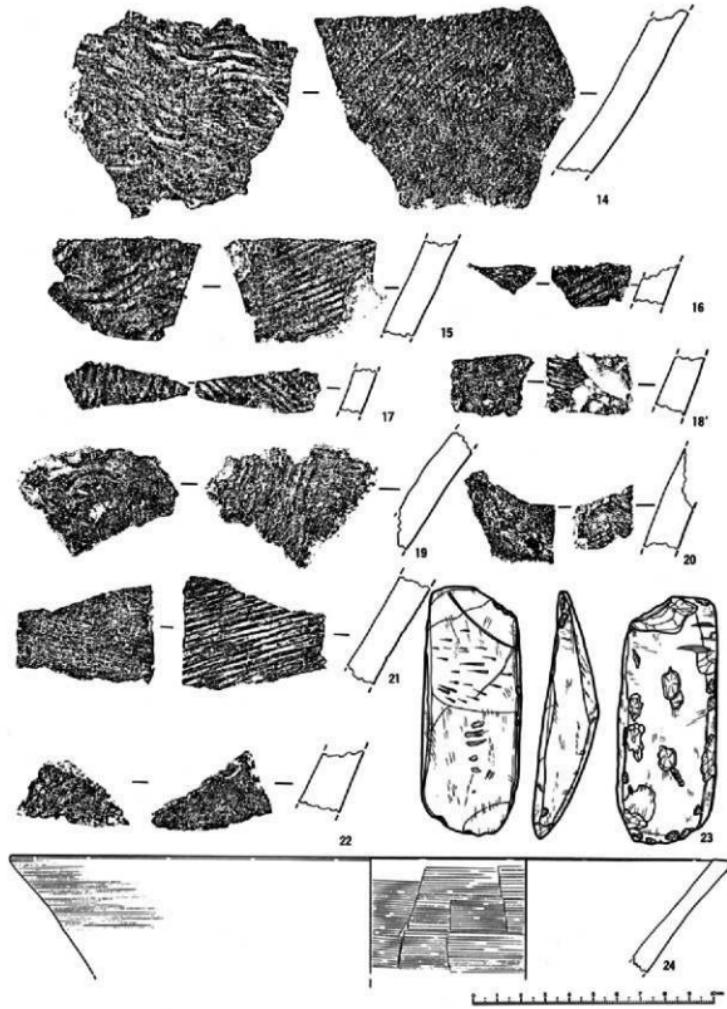
今回の発掘調査で検出された遺物は還元炎焼成を有する須恵器系土器、土師器質の赤焼土器、それに砥石1点を含む40点が調査区のNo9層底面及び洗い場底面から検出している。出土した土器群の大半は細片であるとともに赤焼土器に関しては磨滅が著しく、図化や拓影図が可能であったのは24点であった。ここでは遺物の大半をなす須恵器系土器を中心に述べてみる。

須恵器系土器は灰褐色及び暗灰褐色を有するもので、今回検出された中では最も多く、30点認められた。器形を推測することは困難であるが、主に變形を呈するものが多い様である。ただし図3・4に関しては壺形をなすものと考えられる。表面調整は櫛描き波状文を有するもの1・2、板目状の叩目を有するもの3~8・11・13・16~18、同じ叩目の中でも条線状の叩目を有するもの9・10・12・14・15・19~21と二者に分けられる。前者は須恵器の特質を呈する一方、後者は所謂「中世陶器」の珠州焼系の特徴をもつ。内面調整もまた同様に須恵器的な青海波文、「U」字状、線状となる太状の縄目を用いた押え目を有するもの3~15・17・19の他に円窓による押え目を有するもの16・18・20・22があり、前者は須恵器系、後者は珠州焼系に近い特徴と言えよう。

この様に木和田館出土の土器群は両者の特徴を有しており、須恵器から中世陶器に移行する時期に相当するものと言えよう。年代的には県内の須恵器の消滅と珠州焼（中世陶器）の出現をどの位置に置くかが問題となるが、個人的な考え方として11世紀後半から12世紀前半としておく。



第6図 木和田跡出土遺物(1)



第7図 木和田館跡出土遺物（2）

VI 城館跡研究からみた木和田館の位置

川崎 利夫

山形県内には、古代から近世にかけての城館跡が700余り現存する。米沢市内にも約30余りの城館跡が分布する。それらの多くは、15・16世紀の戦国時代に築造されたものと推定されるが、広い意味での城館は、古代から存在するのである。県内に分布する城館跡を時代ごとに分類するならば次のようになるであろう。

1. 古代の城柵跡
2. 初期武士層の館跡
3. 関東武士の下向によって各地に構築される館跡
4. 南北朝内乱期の城館跡
5. 大名領国制へむかう室町期から戦国期の城館跡
6. 元和以後一領國一城制の城館跡

しかし個々の城館跡について、プランや濠跡・土壘などの外観から、その時期を特定することはまだ不充分であり、そこまで研究は進んでいない。最近発掘調査された例は、白鷹町大字高玉の「本館」、藤島町大字平形の「平形館」、藤島町大字藤島の「藤島城」、新庄市大字横前前の「乱馬堂館」などであるが、それらは城館跡の限られた一部の緊急調査であり、何れも出土遺物などから中世に遡る館であるが、必ずしもその全容を明かすにはいたっていない。特に第2期の初期武士層の館跡は、その存在が想定されても、明確に遺構を特定することができなかった。

木和田館は、遺構からみても遺物からみても、甚だ古い館跡である。初期の武士層の館跡であることは明かである。平安時代後期に左大臣藤原頼長の日記「台記」にみえる「屋代莊」のころ、その南辺に位置する有力者主の「館」であった。単郭式の才形館跡は、平安後期から鎌倉時代にいたる初期武士層の館跡として、関東地方において最初に注目された。これらの方形館は、芦田文庫所収、明治大学図書館蔵の「館古絵図」にもっとも典型的に描かれているように、館の周囲に方形に濠がめぐらされ、その内側には濠にそって土壘がめぐり、正面には橋を架して門を構え内部には数棟の建物があらわされている。注目すべきは、門を入って右手に小さな池状の水場があることである。

木和田館の場合は、背後に山を負い、前面に水田が開いた微高地に立地し、平面プランはやや不整の長方形であるが、東に門を開き、規模も約58m×40mと小さいが、東より門を入って約30mのところに石組みによる洗い場様の水溜りが検出された。これは池などというよりも、農具などを洗った水場と推定され、「館古絵図」にも同様の水場があらわされており、きわめて類似している。

遺物の大半は土器であるが、水場のあたりから発見された。もっともこの度の発掘区がそのあ

たりに限定されたからでもある。出土した土器は数十片、酸化炎焼成の赤焼系のものと、還元炎焼成の須恵器系に分類できるが、いずれも小片である。須恵器系の土器には、表面に条線状の叩目文が細かい密接して施されている。裏面は無文のようにみえるが、何らかの押圧痕を認めることが可能。それは珠州焼の中世陶器に特有な小さな礫石によるまるい押圧痕とは趣きを異にして、より須恵器の裏面の押圧痕に共通する。破片から見るに器種は擂鉢や壺で、壺や皿がないことも中世陶器の範疇に入ることは確かであるが、須恵器の技法を残すことは古式の珠州系陶器であることを示している。

珠州焼の起源については、富山県日石寺裏山経塚から出した仁安2年（1167年）銘の壺や擂鉢を上限資料とし、珠洲市上戸町寺社カメリ坂塚の製品を最古のものとしている。それらの中には、裏面に同心円状の押圧痕をとどめるものもあり、明かに須恵器の技法を繼承したものである。従って珠洲焼の成立を12世紀中葉以降とする説が有力である。これらからすれば、現時点では木和田館出土の土器も12世紀前半から中葉にかけての年代が与えられる。わずか數十片の小破片から館の年代を推測することに躊躇するが、いまのところ12世紀代平安時代末期の館と考えておこう。

それではどのような階層の人びとが扱った館であろうか。鎌倉武士が地頭として各地に所領をもち、地頭領主として地域に勢力を持ちはじめたのは13世紀も半ば過ぎてからである。出羽南半にも長井市・大沢氏・安達氏・二階堂氏・三浦氏らの一族の下向を伝える。木和田館の年代はそれより1世紀遅る上に、比較的規模も小さいところからせいぜい数町歩規模の所領と僅かな郎党を従えた小地主である名主的瓦士層の館と考えられるのである。これらの入びとは、當時に農耕に從事し、事ある場合にはその家子・郎党とともに武器をとって、その地域を自衛した。これらの名主層は、その上に立地地頭的武士層に従属する場合が多かった。前面に水田がひらける景観からもより農民的性格の強い武士層であったのだろう。

東国においては、935年に平将門の乱が起り、11世紀後半には前九年の後、後三年の役がつづき、武士団の台頭がめざましいが、この時期に出羽南半においても次代をになう武士層が出現し、当然ながら戦闘行為があったことま想像にかたくない。

木和田館については、今後の調査いかんでは、掘立柱による主屋をはじめ倉庫、馬屋、郎党や下人の住む長屋などもあらわされる可能性があることは、「館古絵図」などからもうかがわれる。これと類似した初期武士層の館跡は、川西町吉田の島津家屋敷、天童市成生の二階堂屋敷など各地に散在しているものと思われるが、発掘調査が行われた例は今までない。木和田館の調査は、典型的な名主的武士層の館として、館内部の建物配置、出土遺物などからその様相が明かにされていて、且つ奥羽における初期武士層の性格や動向を把握する上で、地域史のみならず東国中世史からもきわめて意義することであろう。



▲木和田館跡から北を望む(矢印部分は木和田塙跡)



▲南西コーナ部の土塁



▲北面コーナ部の土壘及び濠跡



▲北東コーナ部の土壘及び濠跡



▲北側部の土壘版築状況



▲発掘調査区全景

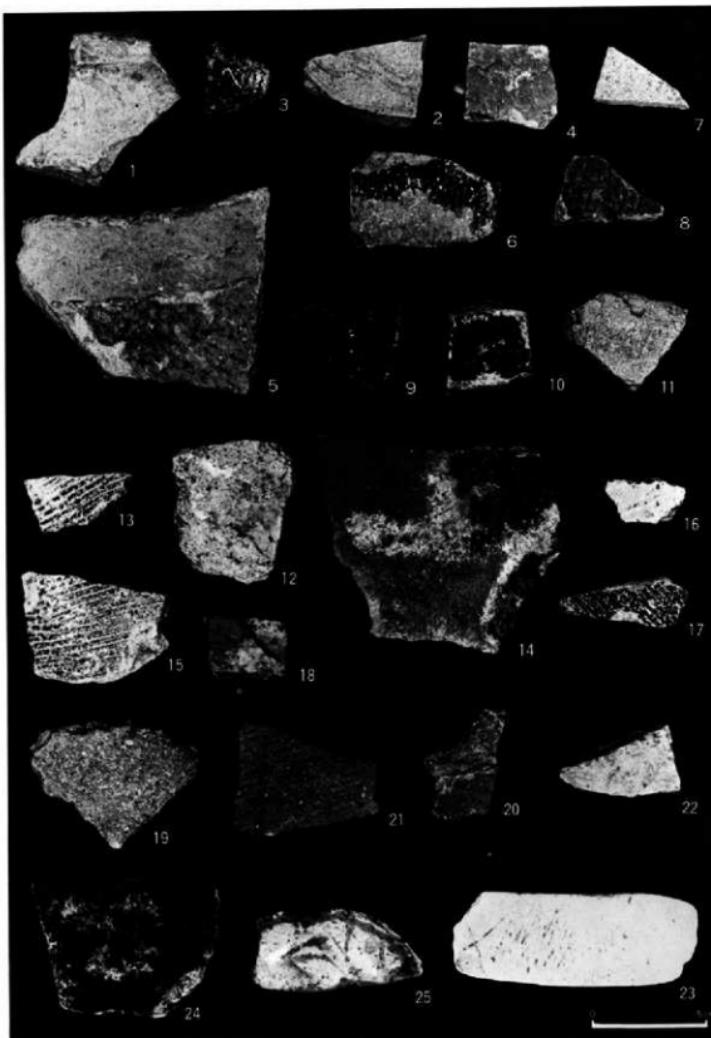


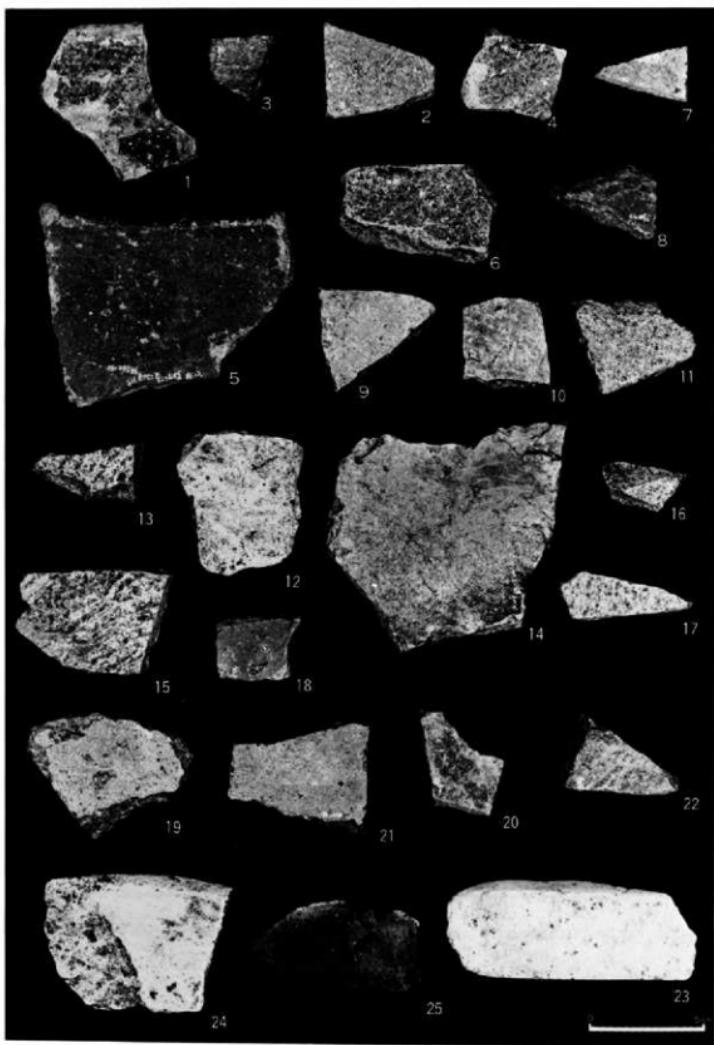
▲水場近景(西より)



▲水場近景(南より)

第五図版 木和田遺跡出土の遺物(1)





米沢市埋蔵文化財調査報告書第20号

木和田館跡第1次調査報告書

昭和62年3月10日 印刷

昭和62年3月31日 発行

発行 米沢市教育委員会
米沢市金池3-1-14
TEL (0238)21-6111

印刷 羽陽印刷
米沢市中央3-9-22
TEL (0238)23-0467